川上 高司 ブログ アーカイヴ

2013年

1月6日

外交委員会同期で固めたオバマ外交政策ー最強の「四人組」

オバマ大統領 2 期目の国務長官は、ジョン・ケリー上院議員が指名された。続く国防長官は誰が指名されるのか注目の的だったが、年が改まるとチャック・ヘーゲル元上院議員の指名がほぼ確実となった。

ヘーゲルの指名に対しては、ヘーゲルがイランに対して柔軟路線であること、ハマスとの対話を主張していることから共和党保守派やイスラエルロビーの猛反発が起こっており、指名承認が危ぶまれているとの報道も見られる。だがそれ以上に支持する声の方がはるかに強い。元国家安全保障補佐官の重鎮ブレント・スコウクロフトをはじめ、ブレジンスキー、カールッチ、オバマ大統領のアドバイザーだったジェームズ・ジョーンズがそろってヘーゲル支持を堂々と打ち上げた。さらには中東各国大使を歴任したライアン・クロッカーをはじめとする元大使たち、元 CENTCOM の将軍たちからも支持が厚くベトナム戦争経験者ゆえに軍部の信頼も獲得している。また著名なジャーナリストたちもこぞってヘーゲルを支持している。まるで大統領候補のような華やかで熱い支持はヘーゲルの人望の厚さを語っている。

ヘーゲルは 1996 年にネブラスカ州の上院議員に当選して以来、2008 年まで議員を務めた。実はケリー、バイデン、オバマの 4 人は 3 年間と短い期間だが任期が重なっており、2005 年から 2008 年までは上院の外交委員会で一緒だった。外交委員会にはさらに小委員会があって担当が分かれている。2005 年から 2006 年の間は、東アジア・太平洋小委員会ではヘーゲル、バイデン、ケリーは一緒だった。同時にヨーロッパ小委員会でヘーゲルとバイデンは一緒だった。更に世界経済貿易などの小委員会ではケリー、ヘーゲル、オバマが一緒だったし中東小委員会ではヘーゲルとオバマは一緒だった。

2007 年から 2008 年までは 4 人はやはり外交政策委員会に属していて、ヘーゲル、ケリー、オバマは東アジア太平洋小委員会に属していた。経済貿易などの小委員会でもヘーゲル、ケリー、オバマは一緒だった。

つまり第 2 期目に重視される東アジア・太平洋地域の外交政策に 4 人が精通し、経済政策にはケリー、オバマ、ヘーゲルが豊富な知識を共有しているのである。この外交政策委員会同期で固めた政権によってオバマの 2 期目の外交政策は運営される。気心が知れている 4 人がまさに 1 枚岩となって外交政策が進められるならば、手強い外交が太平洋で展開される可能性は大きい。外交「四人組」の誕生によりオバマが 2 期

1月8日

オバマ人事ー密かに物議を醸し出すCIA長官指名

国防長官に指名されたチャック・ヘーゲルが注目され、議会の承認を得られるかどうかが大きく取り上げられる陰で､やはり議会で物議を醸し出している人物がいる。オバマ大統領が 2 期目に CIA 長官に指名したジョン・ブレナンは、イラク戦争の時の拷問問題に関わっているのではとの疑惑から、米議会での承認が紛糾しそうなのである。幸か不幸かヘーゲルに注目が集まっているためそれほどメディアでは話題にはならないが承認を得るため大統領は闘いを避けられそうにもない。　ブレナンは CIA の局員として豊富なキャリアを積んできた。特にサウジアラビアでの活動経験からアラビア語が流暢で、アラブ世界をよく知っている。また、前ブッシュ大統領時代にはテネット CIA 長官の補佐官を務めており、2004 年に発覚した米軍によるイラク人への拷問に関わっていたとの疑惑が持たれ、未だにその疑惑は晴れていない。ブレナンはオバマ政権に移行した後は、対テロ政策のアドバイザーとしてオバマ大統領に仕えた。オバマ大統領の信頼は絶大で無人爆撃機による対テロ政策の推進者でもある。昨年話題になった対テロ政策での「暗殺リスト」作成もブレナンの手によるものだといわれている。

議会では彼の拷問疑惑に特にジョン・マケイン上院議員がかみついている。マケイン議員はベトナム戦争時代に捕虜となって過酷な拷問を体験しているだけに、拷問問題には妥協の余地がないほど厳しい。

さらにブレナンが CIA 長官に就任すると、アフガニスタンやパキスタン、イエメンなどへの無人爆撃機による攻撃が増加するのではないかという懸念も生じている。そもそも無人爆撃機による暗殺が正当な手段であるのかという疑問が生じている上、市民の犠牲が増えるという心配もあり人道的な見地からブレナン就任を懸念する声は小さくない。

先にも述べたようにブレナンへの大統領の信頼は絶大である。過去を振り返っても CIA 長官と大統領の関係は必ずしも良好ではなかった。しかも前ブッシュ大統領時代には情報長官が新設されて、CIA 長官は監督下に置かれるようになった。もしブレナンが長官に就任すると、大統領との良好な関係の下で情報長官をも凌駕する強い影響力を持つ可能性がある。

ブレナン指名にしろヘーゲル指名にしろ、本質は議会と大統領の関係をどうするかである。すでにスーザン・ライスの国務長官指名を断念して議会に妥協しているオバマ大統領にとってさらに議会に妥協するのかあるいは本気で対決するのか、この 1 年の関係を決めるともいえる内政の正念場である。

1月12日

アレン司令官の置き土産－アフガン撤退プラン

第２期政権のスタートが目前に迫ってきて、政権を去る人、新たに加わる人が交錯する時期に任期最後の置き土産を大統領に送った人物がいる。オバマ第二期政権のみならずアメリカにとっても重大な意味を持つ「アフガニスタンからの撤退」プランを、ジョン・アレン現地司令官は３種類用意して大統領に提示した。アレン自身は２月に異動予定である。上司のパネッタ国防長官も辞職するため、撤退プランの実現は次の司令官や国防長官に委ねられるため、文字通り「置き土産」となる。

アレン司令官の提示したプランは、2014 年以降アフガニスタンに駐留する部隊の

規模とその役割を示したものであり、撤退ペースや方法について言及したものではない。この３つのプランではいずれも米軍が「完全撤退」するのではなく必要人員は引き続き駐留することが前提となっている。

第 1 プランは、駐留軍は 6 千人規模で、特殊作戦部隊のみがバグラム空軍基地に終結して駐留し対テロ作戦を継続する。

第２プランでは駐留軍は１万人規模で、第１プランの特殊作戦部隊 6 千人に加えてアフガン軍養成のための人員 4 千人が残る。4 千人はアフガン軍の基地に駐留しアフガン軍とともに現場に出ることもある。この場合は NATO 軍による空爆支援の余地が残されることになる。

第３プランは２万人規模の駐留軍となる。第２プランの１万人に加えて、通常の地上部隊１万人がバグラムとカンダハルの二箇所の基地に駐留する。この１万人は、アフガン軍を支援する実働部隊となる。つまりアフガン軍から支援の要請があった場合に展開する部隊となる。

この３つのプランの提示を受けて、オバマ大統領は撤退政策の検討に入ることになる。大統領は「駐留部隊は最小限に抑えたい」との意向があるようで、その規模は 3 千人から 9 千人の間に抑えるのではないかと、米ニューヨークタイムズ紙電子版は推測している。

現実の問題は現在 6 万 6000 人も展開している米兵と装備をどうやって安全に撤退させるかである。昨年来閉鎖されたままのパキスタンからアフガニスタンに通じる輸送道路は相変わらず閉じたままで物資の輸送もままならない状態である。しかも最も反米感情の強いアフガニスタンとパキスタンの国境地域を通過するには、パキスタンの協力が不可欠であるしパキスタンタリバンとの交渉も避けては通れない。困難は山積みである。

だがそれでも撤退してこの長い戦争を終わらせなければならない。そのためには手段を選ばずどんな困難にも立ち向かう、そんな強い意志を胸に秘めてオバマ大統領は第２期政権をスタートさせるのだろう。

1月17日

オバマ2期目は波乱の幕開けー世界はテロのドミノ倒しに揺れるー

1 月 16 日未明、アルジェリアのイン・アメナス郊外に位置する天然ガスプラントがイスラム系テロリスト集団に襲撃され、プラントに勤める 41 名の外国人が人質となる事態が発生した。その他にアルジェリア人も拘束されて、テロリストグループは人質とともにこのプラントに立てこもった。41 名には、13 名のノルウエー人、数名のイギリス人、7 名のアメリカ人、3 名の日本人、1 名のアイルランド人が含まれている。襲撃の際にはイギリス人民間人 1 名が死亡し負傷者もいるようだ。

このプラントはイギリスの BP 社とノルウエーの Statoil 社、アルジェリアの石油会社の共同事業で、日本の企業も参加しておりまさにグローバルなプラントだ。イン・アメナスはアルジェリア東部、リビアとの国境に近いところに位置しており、アルジェリアのこのようなプラントは比較的安全と言われてきた。そのような安全なはずのプラントが襲撃されたことの衝撃は計り知れない。

この襲撃したテログループは、アルジェリアの南に位置するマリの過激派組織のひとつで、アルカイダと繋がりがある。襲撃は 1 月 11 日に始まったフランス軍による

マリへの軍事介入への報復として実行された。彼らの要求は「フランス軍のマリへの介入を停止すること」である。彼らは停止されるまで人質は解放しないと、アルジェリア軍に完全包囲されたプラントに立て籠もっている。彼らは金銭の要求をしているわけではないので、解決はより難しいことが予想される。しかも多くの国が関与することになるのでますますやっかいである。

アルジェリアの南部はマリと国境を接している。マリへ軍事介入したフランス軍と抵抗グループとの衝突が激しくなると、自国への影響を懸念したアルジェリアは 14 日には両国の国境を封鎖しテログループの流入を阻止していた。だが、マリのテログループははるか北東に離れた地での襲撃に成功し世界各国を驚かせた。これは、テロ組織のネットワークはきわめて柔軟かつ強固でやすやすと国境を越えて変幻自在であることを物語っている。

イギリスでは緊急対応チームが現地入りしてアルジェリア政府とともに動き始めている。アメリカのパネッタ国防長官は「必要な手段はなんでも取る」と、軍事介入の可能性を否定しなかった。このテロ行為を見逃せば、北アフリカが新たなアルカイダの「天国」となってしまいかねない。そんな懸念も含まれている。アルカイダはそもそもサウジアラビアで生まれたイスラムスンニ派の過激派組織で、2003 年アメリカがイラクへ侵攻した際には、アルカイダはこぞってイラクへ流入した。

イラクでの情勢が不利になるとアルカイダはアフガニスタンに移り、パキスタンタリバンとの繋がりを強めて勢力を伸ばした。しかし、アメリカの無人爆撃機による熾烈な空爆で存在が危うくなると、次はイエメンに拠点を移した。しかしイエメンでもアメリカの空爆が熾烈になったため、アルカイダは次なる拠点を求めるようになったのではないか。それが北アフリカだとオバマ政権は危惧しているのではないだろうか。エジプトは政変でムスリム同胞団が主導権を握った。スーダンは南部が独立したもののイスラム勢力が強く政情不安である。そしてリビアでもいまだ政情は不安定である。そこへマリのイスラム勢力が強まり拡大すればこれまでよりはるかに広大な地域が「天国」となってしまうのである。2 期目の就任式を目前に控えてまさにオバマ政権の対テロ政策が問われているのである

1月24日

「建国の理念」を訴える就任演説。より強くより理想をめざす国アメリカを求めて

1 月 21 日、オバマ大統領の 2 期目の就任式が行われた。4 年前の熱狂は今回は見受けられず、観客も１８０万人にとどまって前回に比べて静かな就任式となった。オバマ大統領は前回は心なしか終始緊張感に被われた表情だったが、今回は逆に式典の間笑みが絶えることがなくリラックスした余裕あふれる立ち振る舞いだったようだ。心底就任式を楽しんでいるという表情だった。

その就任演説は前回ではアメリカの危機を訴えて団結をアピールした。独立戦争時代の危機に瀕したときのアメリカ市民の勇気を引用して人々に立ち上がることを訴えた。まさにアメリカの危機にあった 2009 年当時の人々の気持ちにふさわしい演説だった。

今回は「人は生まれながらにして平等である」という独立宣言で最も有名な一文を何度も引用して建国の理念に立ち返ることを訴えた。独立後新しい国家建設をめざし

た建国の父たちになぞらえるかのように、危機が去ったのちの次なる目標である理想の国の建設、合衆国の再生にむかっていくことを訴え、「建国の父たちがなしえたことを、今我々は取り組まなくてはならない」と演説で述べた。そして「いち市民としてこの国のとるべき道を決めるのは我々である」と演説をしめくくった。危機は去った、さあ理想の国をめざそうとオバマ大統領は宣言したのである。

国民のオバマ大統領に対する評価は、昨年の大統領選挙で当選して以来上昇傾向にある。当選直後の支持率は５０％前後だったが、今では 52.4 ％とじわじわと上がっている。昨年の小学校での銃乱射事件を受けての銃規制や財政の崖の回避などの待ったなしの問題への対応が評価されていることが伺える。

今後閣僚が入れ替わって新しいチームが作られる。次のチームは顔ぶれからみれば老練で実務に長けた政治家の集まりである。このチーム・オバマの「合衆国再生」を見守っていきたい。

1月28日

就任早々石を置くオバマ大統領の冷徹なアフガン撤退政策

オバマ大統領の 2 期目の前半少なくとも 2014 年までは、最大の課題はアフガニスタンからの撤退であると前回のブログでも書いた。6 万 6000 人の米軍を不安定な地域から無事に撤退させるにはどうしたらいいのか。オバマ大統領は、就任早々まるで石を置くかのように撤退の布陣を固めている。

今年 2 月に交代するアフガニスタン現地司令官であるジョン・アレンは、アフガニスタンでの任務が終了したのちは NATO での米軍の総司令官に指名される予定である。アレンは、昨年のペトレイアス CIA 長官のスキャンダルに関連して女性との不適切な関係が暴露されて失脚するかと思われた。だがその後の国防総省の調査で不適切な関係はなかったとされ、引き続き現地司令官を務めていた。要するにそんなスキャンダルよりも彼の実績、アフガニスタンを知り NATO にも顔が効くその力がこの 2 年間は NATO にとってもアメリカにとっても必要なのである。退役させるわけにはいかない、そのためには多少の不都合には目をつぶる、という現実的な判断なのだろう。

国家安全保障担当補佐官のトム・ドニロンは 1 月末にモスクワを訪問しオバマ大統領の親書をプーチン大統領に届ける、という報道がモスクワのラジオ局「ボイス・オブ・ロシア」の電子版（1 月 11 日付）に流れた。同局はドニロンのモスクワ訪問はオバマ大統領が夏前にロシアを訪問をする可能性を指摘している。ドニロン訪露に関してホワイトハウスの報道官は否定しているが、もしオバマの就任後最初の訪問国がロシアだとしたらオバマはロシアとの関係の改善に本気で取り組むという意志の表れだろう。

ロシアはかつてアフガニスタンから撤退した経験を持ち地政学上も重要な役割を担っている。パキスタン経由のアフガニスタンへの輸送ルートが閉鎖状態の間、ロシア・中央アジア経由の代替ルートが使われている。ロシアとの関係が改善されればロシアの経験と撤退ルートの確保という協力を得ることができる。

イランとの関係の改善もアフガニスタン撤退には必要だろう。イランとの関係が改善されればイランよりの政権となっているイラクの協力も期待できる。さらにパキス

タンの協力なくしては撤退はあり得ない。パキスタンとの直接的な関係の改善もさることながら、同国の最大の支援国である中国を通しての協力関係の構築も考えられる。

さらに情報面ではアラビア語が堪能でイスラム社会に理解の深いジョン・ブレナンを CIA 長官に起用して側面を固める。特に CIA 職員としてサウジアラビアに駐在経験があるブレナンは、イスラム教のネットワークという側面から撤退政策を補強するだろう。

アフガニスタンからの撤退は、周辺諸国の協力が不可欠である。また、ヨーロッパ諸国との協力態勢も必要である。バイデンは 2 月にはドイツやフランス、イギリスを訪問する。北アフリカのイスラム過激派の問題も重要だが、撤退に向けての地ならしという側面も十分考えられる。現実的かつシビアな撤退政策が始まっているのである。

1月31日

きまじめな数字オタクが財務長官に－なぜか敵からも信頼されるジェイコブ・ルー

2008 年の金融危機を乗り切ったガイトナー財務長官は早くから辞任の意向を表明していた。ユーロ危機でもヨーロッパを支えアメリカ経済の回復に尽力したその手腕は高く評価されるので惜しまれるが、ニューヨーク連銀で総裁を勤めていた時以来、危機に追われてきた身としては十分尽くしたという気持ちが強いのだろう。アメリカ経済の回復は上向きとはいえ確固たるものではない中、次の財務長官にオバマ大統領はジェイコブ・ルー大統領主席補佐官を指名した。そのあまりにも地味な存在に、アメリカのみならず世界でも「誰だ？」と思った人々は少なくないだろう。

ルーはポーランド系で敬虔なユダヤ教徒である。57 歳とオバマと年齢が近く、CIA 長官に指名されたジョン・ブレナンとは同い年である。ニューヨークで生まれ育った生粋のニューヨーカーで、いまでもニューヨークから離れない。ハーバード大学とジョージタウン大学を卒業した、まさに東部エリートである。議員の補佐官を務めた後にクリントン政権時代に予算管理局局長、大統領のアドバイザーを務めた。ブッシュ政権時代にはシティグループに席を置き、2008 年のリーマンショックの時はまさにシティにいてガイトナーとは反対側から金融危機を体験した。

オバマ大統領の時代になると国務副長官としてクリントン長官に仕え、予算管理局局長、大統領首席補佐官と歴任した。きまじめで数字オタクなルーは寡黙で地味だが、ひとたび数字を語らせると饒舌で情熱的になる。さすがのオバマ大統領もルーの予算報告が始まると、「君にまかせるよ。信頼しているから」と報告を打ち切ってしまうほどだという。大統領の信頼が厚いことは確かだ。

議会でも共和党相手に手強い交渉を展開するが、なぜか共和党からの信頼は抜群に厚く人気者である。議会に受けがよくて顔の効くルーの起用は明らかに議会対策で、予算問題や財政問題を一手にまかせる腹づもりなのだろう。世界の舞台では知名度が限りなくゼロに近いルーにガイトナーのような華やかな活躍は求めていないということだ。

ルーの起用の唯一の懸念は、こどものいたずら書きのようなサインだ。財務長官のサインはドル紙幣に印刷される。世界中で飛び交うドル紙幣にこどものいたずら書きのようなサインでは威厳もなにもないと当局は頭を痛めている。だが「それもいいではないか」と歓迎する人々も少なからずいるところを見ると、何をしても憎めない存

在なのだろう。
　しかしそんな人当たりの良さにうっかり乗せられると痛い目に遭う。数字で攻めるオタクな財務長官だからこそタフな交渉相手なのだ。